

2015年10月分 尾瀬ヶ原レポート

(朗読されるときは小見出しを飛ばしてください)

50 年来の夢をようやく実現

この夏、7月27日、28日と1泊2日で妻と尾瀬ヶ原に行ってきました。長野県の高校を卒業して東京に出てきたばかりの昭和30年代——「♪♪♪夏がくれば思い出す・・・」の歌が流行っていました。当時、大田区の自動車部品を売る小さな会社で働きながら、夕方からは高田馬場にある大学に通っていました。

卒業後、最初にNHK学園高校の教師を務め、その後、聖教新聞社に勤務、特派員も経験。定年後はスペインに留学し、続いて「世界文学紀行」を始めた、といった状態でこれまでとても忙しかった。なかなか時間がとれない。“いつか水芭蕉の咲く湿原を訪ねたいものだ”と思っただけで半世紀余りが経っていました。

まだ取材予定の海外の文学作品も若干残っていますが、お金の算段や体力的なことも考え国内にも目を向けるようになりました。その第一弾としてまだ行っていない尾瀬が浮かんで来たわけです。

すでに何回も訪れている方もいらっしゃると思いますが、せっかくなので文学作品の舞台の紀行とは異なりますが「尾瀬の今」をご紹介します。

ネットで情報ゲットするも・・・

今は何でもネットで情報が得られる時代です。7月半ば、パソコンで「尾瀬ヶ原」と打ち込み検索していると「水芭蕉は時期遅れですがニッコウキスゲの群生が迎えてくれますよ」との誘い。

半世紀前の記憶では、尾瀬に行くのには新宿発の夜行バスで行く日帰りがほとんどでした。若い頃はそれでもよかったでしょう。でも夫婦ともに70を超えると体力的にとっても持たない。そこで再びネットをチェックしていると「上越新幹線で行く1泊2日の旅」が目にとまりました。写真付きで山小屋も紹介されていたので、立地的にもサービスもよさそうな尾瀬ヶ原の奥にある弥四郎小屋を予約しました。新幹線、山荘料金を合わせて一人当たり19800円。リーズナブルな値段と思い予約し切符も手に入れました。

ところが・・・

新幹線の下車駅・上毛高原から尾瀬ハイキングコースの入り口「鳩待峠」までの路線バスとマイクロバスの乗車時間が2時間半もかかったのです。東京駅から上毛高原までの1時間20分のほぼ倍です。しかも路線バス料金が2450円、後半の鳩待峠までのマイクロバスが930円で合計3380円。尾瀬で言葉を交わした同じハイカーによると、新宿駅近くから朝出発する直行バスもあり、往復7500円でマイクロバス乗り換え地点まで行けることがわかりました。ネットの便利さも調べ方も腕次第なんだなあ、と反省させられた次第です。

コースの9割が木道！

値段のことも大事だけどせっかく尾瀬まで来たからには楽しくいかなきゃ！鳩待峠の休憩所で軽い腹ごしらえをすると私たちは最もポピュラーなハイキングコースを歩き始めました。標高1591mの峠から1400mの尾瀬ヶ原までの森林の中の下り道。最初

にゴツゴツとした石の並ぶ坂を下りていくとやがて木道に変わりました。2~3枚の厚い板が60~100センチ幅に敷かれています。それが往路用と復路用と2本あり右側通行が原則。1時間弱で「山の鼻（やまのは）」に着くと、ここからは平坦な湿原がずーっと続いています。

「こんにちは！」「こんにちは！」

行きかうハイカーとは声を掛け合いながら進みます。でも、どこまで行っても期待していたニッコウキスゲの群生は見られません。途中で数本とか数十本単位でポツポツと見えました。“群生”には程遠い。聞けば「今年はあまりにも暑かったので花の盛りは7月中旬に終わってしまった」とのこと。訪れるのが半月遅かったのです。

風呂もありビールも飲める山小屋！？

「山の鼻」から尾瀬ヶ原の一番奥の下田代十字路まで2時間余り。予約してあった宿泊の弥四郎小屋は意外にすいていました。200人定員のところ60人くらいの泊り客。週末を外していたからかもしれません。周囲には他に3件ほどの山小屋もありました。宿泊客の半分余りが登山杖、登山靴に大きなリック。至仏山などに登る本格的な登山者のようです。こちらは、いわゆるハイキングなので運動靴に軽いリュックのみ。

山小屋の時間帯は平地とは変わってきます。夕食は5時半。消灯9時。翌日の朝食は6時です。食事のメニューはいかにも山荘らしい質素なもの。それでも注文すればビールが飲めるのには驚きました。もちろん値段も高くなりますが。それに一度に5~6人が入れる風呂が男女ともありました。やや熱い湯は、歩き疲れた足の先まで血が通うようでとてもリラックスできるものでした。

食事のテーブルで一緒になった宿泊客同士の対話も貴重な情報交換の機会です。「今日はどこに行ってきた」「明日はどこどこに登る予定」とか、同じ山仲間の気安さから会話も弾みます。そこで聞いた「情報」が翌日まさに役に立ったのです。

尾瀬ヶ原の“天敵”は雷

翌朝、4時過ぎに目が覚めたら雨の音。遠くで雷が聞こえてきます。自宅を出る前のテレビの天気予報によれば、群馬県を含めた関東地方はずうっと一週間先まで晴天でした。やはり山岳地帯の気候は変化が激しいのです。

「さあ、どうするか!？」

雨具は二人とも持参してきているものの樹が1本も見えない大湿原のど真ん中を2時間あまり歩くのは危険の上ありません。雷が落ちても逃げるところがないのです。そこで昨晩聞いた貴重な情報：

「湿原の淵を歩く木道があります。すぐ近くが森林になっているので、いざという時は逃げ込むことができる。少し遠回りになるけれど雷雨の時には安全な道ですね」

事前に余り調査をしてこなかった私たちにとってはありがたい情報でした。湿原のど真ん中を歩けば2時間で行けるところを30分あまり余計にかかってしまいましたが、雷の恐怖からは逃れることができたのです。

途中で雨も上がりました。最後のゴツゴツの石の坂を登る頃にはまた降ってきましたが・・・まさに山岳地方特有の天候変化ではありました。

2日間で38000歩

尾瀬は自然公園法の特別保護地区に、また文化財保護法による特別天然記念物に指定されており、枯れ葉1枚、枯れ草1本でも拾うことが禁じられています。また湿原は非常に弱いので、木道から降りて自然を踏みつけないことが要請されています。それにゴミの持ち帰り運動が徹底されている。

公衆トイレでは「環境の維持管理のために」とチップ（1回100円くらい）が求められています。トイレのチップといえはイタリアを訪れた際にはどこの公衆トイレに入っても1回1ユーロから2ユーロ（130円～260円）のチップを求められたことを思い出すと当然の成り行きでしょう。私はそんなことが思い出され、ふだんは「節約、節約」の自分が意外にもチップを奮発してきたのでした。

こうして1日目の走行歩数18000、2日目が20000で合計38000歩となりました。帰宅後3日間ほどは足の筋肉痛が残りましたが、珍しくよく歩いた、また変わりやすい夏の山の気候と風景を味わえた尾瀬ハイクとなったのでした。

11月分 在日外国人のリレー相談会から

今月は私が会員として活動しているTMCのことについてご紹介します。TMCとはTachikawa Multicultural（マルチカルチュラル）Centerの略で「たちかわ多文化共生センター」というNPO法人で、在日外国人の支援を活動の柱にしています。同時に日本人も外国人の生き方や文化を理解しお互いに仲良く共生していこう、といった目的も含まれています。

活動の拠点はJR立川駅から徒歩5分の立川市図書館の建物の5階「アイム」。ここで私も昨年まで6年間ほど月に1回、海外相談室の担当をしていました。TMCの活動は日常的に多岐にわたっていますが、全体の大きな行事としては例年7月に行われる「リレー相談会」と11月の「世界ふれあい祭り」の二つです。

今年のリレー相談会は7月4日の土曜日に「アイム」で開催されました。これは「リレー」の名の通り、都内の各区と三多摩は武蔵野、町田、八王子、西東京市、そして立川で毎月交代で行われている相談会で大変な力が入っています。

案内チラシのタイトルに「外国人のためのリレー専門家相談会＝無料」とあるように、4日の相談会には、専門家として弁護士が5人、行政書士3人、社会保険労務士1人、社会福祉士2人、教育相談員1人、税理士1人の計13人。通訳ボランティアとして中国語5人、英語7人、スペイン語3人、ポルトガル語2人、フランス語1人、ハンガリー語1人、ロシア語1人、タガログ語1人、インドネシア語1人の22人が参加しました。その他、運営スタッフとして14人がボランティアで入っていて総勢50人近い態勢です。

この日の相談者は17人。出身国別では中国、韓国、コロンビア、アメリカ、ペルー、ロシア、フィリピン、スペイン、ザンビアの9カ国。それぞれほぼ満足できる相談結果を持って帰られたのではないかと考えています。相談内容はすべて秘密にされていますが、おおまかに分類すると、ビザの問題、労働環境の問題（例えば、同じ仕事をしているのに日本人スタッフと待遇面で同じように扱ってもらえない、など）、離婚問題、子供の教育問題などでした。この日は立川市ばかりでなく都内からも三多摩の他市からも相談に来ていま

した。私自身は子供の不登校に悩んでいる問題について、教育相談員との対話のスペイン語通訳にあたったところです。

こうした相談会の前には準備のための役員会が数回、語学ボランティアも研修打ち合わせ会が 2 回ほどあります。ボランティアといっても職場でプロの通訳として活躍している人、来日して何年もたち日本語もかなり使えるようになった在日外国人、またプロ通訳までには届かないけれど自分の専門言語に磨きをかけつつある人などもいます。

相談の内容には法律問題に関係する事項も多いので、語学ボランティアには事前に専門家から「通訳のための法律相談基礎知識」といったような研修会も開かれます。

例えば在留資格のない外国人の弁護士または行政書士との相談の通訳をする場合には、「出頭」「受理」「不受理」「意思表示」「不服申し立て」「在留特別許可」「準抛法」等々、家庭問題では「協議離婚」「離婚届け」「不倫」「性的関係」「家庭内暴力」「慰謝料」「養育費」などの言葉も事前に調べておかねばなりません。

それに通訳の心得としては①自分の考えを言うのではなく通訳に徹する。通訳が自分の言葉でアドバイスをしてはいけない。②自分がわからないことはわからないとはっきり言う。③相談者が分かっていない場合も、そのことを分かっていないと専門家に伝える。④似て非なる日本語に注意すること。例えば「懲役と禁固」「解雇と退職」「難民と避難民」「ビザと在留資格」等々。

少し専門的な話になって難しいかもしれませんが、日本語がわからない外国人との対応にはこんな準備や配慮も求められる、ということなのです。そして通訳にとって一番大事なものは相談内容を知ったことに対する守秘義務です。

一方、毎週開かれている海外相談室で私が担当したときに持ちかけられた問題は、在留資格の問題、医療相談、子供の教育問題、職場で差別を受けていること、離婚問題などが主なものでした。この相談室には専門家は配備されていなく語学ボランティア一人で対応します。とはいえ、私自身は専門家でもないので、自分の 10 年余の海外体験と、知っている範囲の法律知識と日本国内の現状理解をもとにアドバイスをして、内容によっては専門家につなげるようにしてきたものです。

現在、立川市には約 3000 人、昭島市には約 2000 人の外国人が住んでいます。地元昭島市では、ゴミの回収袋に可燃、不燃、資源、プラスチックなどの日本語のほかに英語、中国語、韓国語、スペイン語の 4 言語で書かれています。これでどこの国の人が市内に多いか大体の判断はつきます。スペイン語はスペイン本国というより中南米 18 カ国の人を対象でしょう。以前に地方の都市で、言葉がわからないがために、また日本の習慣や生活様式に慣れていないがために、ゴミを勝手な日に勝手な場所に出して行政が手を焼いていた、といった話を聞いたこともありました。少しでもそうした理解の溝が埋まる努力が大切になってくる。たぶん他の市区町村でもいろんな工夫をしていると思いますが、昭島市のゴミ袋はその良い一例かもしれません。

今年の「世界ふれあい祭り」は 11 月 7 日・土曜日と 8 日・日曜日に、昭和記念国立公園内で行われる立川市の産業まつり [楽(らく)市] と合わせて同じ会場で開催されます。

「東京にある各国の大使館からその国の文化を紹介するような店を出してもらったらどうでしょうか」——7 年ほど前の私の提案が少しずつ軌道に乗り、現在は 15 から 20 の大使

館から民芸品や食べ物の出店もあります。一方で、外国人を対象に日本の着物を着ての撮影会もあつたりして来場者に結構な人気と盛り上がりを見せています。

5年後のオリンピックを機にこれから来日する外国人また日本に住む外国人もどんどん増えていくでしょう。日本の将来の労働供給力を見たとき、在日外国人なしには産業の維持発展は難しい状況にあります。そこで大事なものは、お互いの文化、生き方を理解し尊重し合う共生社会を築いていくことなのです。その一助になればと、また地元・昭島市でもいつかそうした活動ができる可能性を探るためにも、お隣の市の行事に参加しているところでは。

12月 宴会を盛り上げるエピソード

(最後の「いわせてもらお」が長過ぎれば適宜外して下さって結構です)

12月に入ると忘年会、クリスマス・パーティなどとアルコールの入った飲食の集いが多くなりますね。そのとき会場を楽しく盛り上げるのに一役買えたら、参加者から感謝され、周囲からの評価も上がるかもしれません。以下は、幹事はもちろん一参加者としても役に立つ「飲み会を盛り上げるエピソード」集です。

内容は、これまでに読んだ新聞や雑誌、書籍などからの引用が多いですが、必要な場合には出典を明確にしていますので問題ありません。まして利益を得るために印刷して発表するわけでもないし、飲み会の席の余興ですので・・・

実際に私が話して大受けした話ばかりです。よかったら参考にしてご活用ください。

まずは、お酒は人生を楽しくしてくれます。昔の歌人も詠んでいます。

「人の世に楽しみ多し然れども酒なしにて何の楽しみ」(若山牧水)

そう、お酒はこんなにも愛されているのですが、生まれつきというか、体質的にというか歴史上のこんなに偉い人も飲めなかった、という記録があります。

歴史上の下戸：日本では、織田信長、西郷隆盛、松尾芭蕉、夏目漱石

海外では、チンギス・ハン、ナポレオン、ヒットラー、毛沢東

——あの勇猛だった、または知性の塊だったような人の名前を見て私も驚いたものです。

以下は新聞や雑誌に載っていた面白い川柳です。作者は記録してありませんがご紹介します。

恋人がいるかと聞かれ「ハイ要ります」

きっと先輩が会社の上司から個人生活のことを聞かれたのでしょう。とっさにその質問をきっかけに「いたら紹介してください」と頼んだところが面白いですね。

カラオケで美声聞かせて入れ歯落ち

置き場所を思い出せない備忘録

角が取れ丸くなるのは背中だけ

喜寿祝い寿司に集まり我孤独

この4首はいわゆるシニア、高齢者の姿や生活を詠んだもの。少し自虐的なニュアンスもありますが誰でも思い当たることがありユーモアと捉えられるでしょう。特に最後の句は、喜寿のお祝いに集まりながら当の本人をほっぽっておくという、あり得る姿に周囲への皮肉も込められていますよね。

川柳ではありませんが、アルコールが毎日欠かせない患者が、病院で問診の時：

医者に「お酒飲まれますか？」と聞かれ「あるんだっただきます」
意識してトンチンカンな返答をしたところが面白い。

次は日本ペンクラブの会報に載っていた米原万里さんの言葉です。彼女は9年ほど前に亡くなりましたが、ロシア語通訳でエッセイスト。下ネタとダジャレが得意でいっぱい面白い話を残しています。

その一つ。

「まず、男は慌てることなく、優しい手つきでスカートをおろした。はやる心を抑えて、ゆっくりとブラウスをはいだ。次にブラジャーのホックをはずして引っ張ると、ブラジャーはそのまま男の足元にパラリと落ちた。それから男は、一気にパンティを引きずりおろした。今や、男の前には、むき出しの洗濯ロープがあった・・・」

「この洗濯ロープが最初から分かっていると、ちっとも面白くない話ですが、皆さんが何を想像したのか知りませんが（笑い）、そちらの方に想像力が行くように最大限、力を尽くすわけです。そうすると、男が洗濯物を取り入れているという平凡な風景が笑い話になるわけですね」

話の組み立てが上手ですよええ。

最後に朝日新聞に掲載されていた「いわせてもらお」から、この10年間に私が最も面白いと思った傑作の紹介です。

◎騒々しい

電車で乗り合わせた3人の中年女性。「イヤホンからもれる音楽ってうるさいわ」

「はた迷惑よね」「近頃の若い子は周りを考えないから」と口々に文句を言っていた。彼女たちが電車を降りた瞬間、男性のため息交じりの声が聞こえてきた。「うるさくて本が読めやしない」（横浜市・みんなでうなずいた・63歳）

◎人のふり見て・・・

パン屋のレジに並んでいたら、会計を済ませた前の客が「お客さま、お釣りを忘れていきます」と店員に言われていた。「そそっかしいわね」と思いながら、しっかりとお釣りを受け取った私。でも、店を出るときやはり声をかけられた。「お客さま、パンをお忘れです」（茨城県ひたちなか市・我は忘れないでいたいです・64歳）

◎心配の種は・・・

手術で入院することになった。心配しないように子供たちに明るく告げたら高3の長女が

「え、ご飯、どうするの?」。そう来るかと思いながら「他に、言うことあるんじゃない?」
と言うと、しばらく考えて、ポツリ。「じゃあ、洗濯はどうするの?」
(広島県東広島市・そんなの自分でやりなさい!・47歳)

◎ ドレミファソ

一昨年、定年退職した夫(62)は一人で行くことがほとんどない。どこへ行くのも私と一緒に。先日、外出先であった友人(62)からも、「ラブラブでいいわね!」と冷やかされた。でも、私の気持ちは「ラ」じゃなくて「シ」なんですけど・・・
(埼玉県久喜市・一人でブラブラされるよりマシかな?・59歳)

◎ アンチエイジング

年齢に逆らいたい微妙な年頃の私。洗面台の戸棚の奥に白髪染めを隠すように置こうとしたら、先に夫の育毛剤が置いてあった。やっぱり、と思ったけれど、少し離れたところに置き、互いに気づかぬふりをしている。
(千葉県船橋市・口に出さないのが思いやり・59歳)

◎ 愛(ア・イ)の違い!?

初孫がカタコトを言い始めた。婿方の祖父母はバアバとジイジと呼ばせ、娘方の当方はババアとジジイと呼ばせて区別している。それにしても、アイの置き場所でこんなにも違うものか。
(横浜市・バアバと呼ばれたいババア・65)

◎ 交代

夕食後、妻に絵本を読んでくれとお願いする2歳の娘。
「お母さんはお皿を洗わないといけないから、お父さんに頼んでおいで」と言われると素直にうなずき、私のもとへ走ってきて叫んだ。「お父さん、お皿洗って!」
(大分県日田市・読み聞かせより、皿洗いが得意です・43歳)

◎ 本物の味

5歳の息子はシューマイが大好き。いつも冷凍食品でゴマかしているが、久しぶりに手作りすることに。息子は一口食べて大喜びで言った。「オイシー! スゴイ! 本物の冷凍食品みたい!」
(横浜市・恐縮してグリーンピースのように小さくなった私・45歳)

◎ 妙味

飲食店でアルバイトをしていた時のこと。同年代ぐらいの男性から「焼きナス」を注文された。冗談で「ボケナス、お待たせいたしました」と差し出したら、「ありがとう、おたんこナス」と返された。
(東京都東久留米市・秋ナス大好き・63歳)

◎勝負？

下の息子（13歳）は育ち盛りで、私の身長を抜くのも時間の問題だ。「あ～あ。私がこの家で一番チビになっちゃうよ」と私がぼやくのを聞いて、夫（52歳）が言った。「いいじゃないか。体重では勝っているのだから・・・」

（東京都町田市・慰めになっていません・49歳）

よくもこんなに面白い言葉遊びができるものだと、各作者のトンチ力に脱帽しています。